

「大腸疾患のX線・内視鏡診断と臨床病理」

癌研究会附属病院・副院長 武藤徹一郎
 京都がん協会・副所長 多田 正大 編集
 東京大学教授・腫瘍外科 名川 弘一
 京都第一赤十字病院・副部長 清水 誠治

横浜市民病院・副院長

福 島 恒 男

1999年11月、武藤徹一郎・多田正大両先生らは御一門の専門家の共同執筆という形で「大腸疾患のX線・内視鏡診断と臨床病理」を出版された。筆者が本書を一読した感想としては、内科・外科の若い医師で、消化器疾患に興味を持っておられる方にぜひ一読を勧めたいというものであった。また、座右に置いて必要な折に再読したり、臨床病理学的事項を確認したりする第一線の臨床医にも極めて有意義な書物であることを感じた。この第一線の先生方は若い先生方を教える機会も何かと多いだろうが、これまでご自分で経験された症例のX線・内視鏡像、病理診断までの所見を念頭に置きつつ本書を読めば、指導書としても役に立つものにもなろう。

本書には、今日時点の大腸病学におけるX線・内視鏡・病理診断の最新の知識が簡潔にまとめられている。腫瘍性病変・炎症性病変など重要なものにはそれなりの力点が置かれ、その他にもバランス良く適宜頁数が割り振られ、豊富で鮮明な写真が配置されている。特に特徴的な

とは、1つ1つの文章が簡潔であり、知りたいと思う項目は20～30分で読み終えることができることである。これらの記述と、先ほど述べた画像がともに印象に残るように入念に意図されているのである。つまり疾患の知識と画像のバランスという面からみると、どちらにも偏らず、読みながら画像をinputできるよう編集されており、見事である。研修医にとっては自らの症例の位置付け、疾患理解に役立ち、専門医レベルの方には治療方針の決定、患者指導などにも役立つ。読者はそのうえで、更に踏み込んで、本書に記載されていない新しい所見を見つけていただき、大腸病学の進歩に寄与していただければ大変喜ばしい。

本書はこのように多くの読者を満足させることは必至であるが、ここで、将来改訂されるときに編者に望みたいことを、二申し述べたい。それは本書がもう少し大判で、画像が大きいと更に迫力が増すのではないかと思われたことである。姉妹書として出版され好評である磨伊正義・望月福治著の「胃疾患のX線・

内視鏡診断と臨床病理」との関係もあり、この点は出版社の意向もあろう。もう1つ、本書は慢性の大腸疾患に関する記載が中心で、急性腹症を呈した疾患の診断や対処方法の項目があれば、実地の臨床研修医にとって更に役立つものになったであろうことである。これらの点は今後ご検討いただければと思う。

いずれにしても、先輩研究者・臨床医のライフワークや労苦の結晶が、場合によってはわずか数行の中に凝縮してまとめられている。若い医師が本書を通して、大腸疾患に関わる多くの臨床的・臨床病理学的事項を読み取っていただければ、書評者としても誠に嬉しいことである。そして本書が1つの刺激剤となり、これを越えた成果が産み出され、日本の大腸病学が更に進歩・発展していけばと願う次第である。

● B5 頁312 図65 写真167
 カラー写真298 色図4 表73 1999
 定価(本体20,000円+税) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)